裸の和尚さん　　岡本　悠

みくる、は、お祈りした

何妙法蓮華経

埼玉のお寺

俺は、高校を中退して、予備校に通っていた

そこの、校長が寺を勧めてくれた

とりあえず、２週間ね

冬だった

朝は６時から、座禅がある

その次は、お経

「野菜根を煮たりして～」

そして、朝、温かい食事

俺は、慣れない手つきで

茶瓶にお茶を組んだり

食器を洗ったりした

窓から、お客さんが来る

そして、和尚さんと談笑

俺は、邪魔にならないように、

お茶を出したりして、

気を遣う

庭を掃いてきます、ということもあった

砂をとらないように

塵だけを取る

和尚さんは、お酒が好きだった

そして、笛も好きだった

ゴミは直接、火で焼いた

ファイヤー！

生生しかった

ジャンパーの皮が焼けてしまった

みっともない

大泉逸郎の「孫」が、流れていた

俺は、プロレスが好きだったが、

和尚さんは、ボクシングが好きだった

ある深夜、今日だけ、深夜のプロレス見させてください

と言い、天龍　ー　武藤の、タイトルマッチを見た

途中で、和尚さんが現れて、

「ある程度したら、寝ろよ」と言った

試合は、天龍が勝った

その晩、俺は、気持ちが高揚して、眠れなかった

和尚さんと、加湿器を買いにいくことになった

和尚さんが、自分の車で運転してくれた

俺は、弟子のように

和尚さんの前を歩き

ドアを開けて通したり

自動ドアを踏んで、タイミングよく開けたりした

ある日、和尚さんが留守をした

なので、窓拭きを命じられた

しかし、まだ 10 代

母の声も聴きたい

勝手に電話をかけた

そうしたら、口論になってしまい

ずっと、電話していた

窓ガラスも拭いたが

ちゃんと拭いていなかった

帰ってから、和尚さんの雷が落ちた

「こんなのでは駄目だ！」と、注意された

明らかに、酷かった

夜は、酒仲間のオジサンが来た

和尚さんと、話している

俺が、10 時くらいに「寝ます」と引き揚げると

オジサンは、「えっ、もう寝るの？　今からじゃん」

と言う

和尚さんは「朝が、早いからいいんだ」

と、たしなめてくれた

和尚さんは、バスルームで笛を吹いた

時には、英語の勉強もしていた

当時では、珍しく、インターネットなどもしていた

ある時、和尚さんは言った

一緒に、四国や、沖縄、歩こうか？

俺は、自信がなかった

その時から、鬱病の薬を飲んでいたのもあったが、

自分の進路を、和尚さんの行く道にあずける自信がなかった

まだ、実家も恋しかったし、

俺は、田舎の街で、

歩いて、郵便局に出しにいく仕事などを頼まれた

夕方、かげらう、が泣いていた

俺は、夕陽を見つめると、

涙がこぼれた

晴れて、２週間の修行をクリアした

また、20歳くらいであったであろう

今度は、少しの間だけ、お世話になった

俺は、ある空き部屋で、CDラジカセで、

ディーンの「このまま君だけを奪い去りたい」などを、大声で熱唱した

寺に戻ると、和尚さんが、笑っていた

聴こえたよ、と言っていた

和尚さんは「俺の笛と、お前の歌だな」と言った

お客さんも来て、歌が聴こえたと続々と言われた

少し、恥ずかしかった

１日で中断した

和尚さんが、料理を作ってくれた

野菜などをいれて、煮て、食べるという食事

俺は、「ニンジンをそのまま突っ込んだような食事」と言うと

和尚さんは、笑って

「ニンジンをそのまま突っ込んだような食事だって、よういうな～」と言った

俺は、少し失礼なことを言ったと思ったが、自分で面白いことを言ったと思った

謝肉祭の日、気持ちは少し面倒だったが、机やイスを並べる手伝いをした

和尚さんは、今回は、途中から、ずっと風邪で寝込んでいた

和尚さんは、俺は、医者に頼るのが嫌いなんだ、と言った

だから、薬ももらわず、自分の気力で、治そうとした

帰る間際の日、庭の手入れを任された

俺は、自分なりには一生懸命には刈ったが、

刈りすぎてしまって、

和尚さんの家が、隣の家から丸見えになってしまった

和尚さんには「ようやってくれたな～」と、呆れて笑われてしまった

お客さんも、それを指摘して、笑っていた

俺は、明らかにしまった、と思ったが、どうしようもなかった

最後に来たのは、22 歳くらいの時だ

精神病院退院の為の、受け皿として、迎えてくれた

和尚さんは、おいしいうどんを作ってくれた

それは、嬉しかったが、

俺は、早く実家に帰りたかった

当日だったと思うが、

父と車で話した

父は、「あと１週間くらい、頑張ってみて」と言うが

俺は、「どうしても帰りたい」と粘った

和尚さんが、その様子を見て、呼びに来た

１回室内で、父と飯を食べたが

ヒーターか何かを、２階から１階に戻した

もう帰るという、意思表示だった

携帯電話で、母と長々と口論をしていると

父も待たされて、「もう帰るから」と言う

そして、薬だけ帰して欲しいと言い

父は、車で帰った

俺は、その後、実家に帰った

和尚さんは、電話で「また、来いよ」と言った、それが最後だった

和尚さんは見抜いていたのかもしれない、裸の俺を...

「完」